1525号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2026.2.9
〒690-0871 島根県松江市東奥谷町386-7　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

老い老いに

木幡智恵美

68

「定年まで大分あるのに辞めるなんてもったいない」「生活していけるの」など、辞めることを伝え聞いた知人はあれこれ言ってきた。まず、もったいないなどとは微塵も思わなかった。仕事に自信を無くし、給料に見合うだけの仕事をしているだろうかと自問し続けていたので、給料をもらうこと自体が畏れ多く思えていた。生活については、子育て中でまだまだお金がかかる。長男が私立の大学、しかも理系だから学費が高く、都会で生活するにはある程度の額の仕送りが必要だ。二男も高校生活を一年残している。それについては二人分の退職金をつぎ込めばなんとかなると思えた。日々の生活については、もともと贅沢とは縁遠い暮らしをしてきたのでやりくりしながらやっていけるだろう。

早期退職に至ったのには、もう一つ変な思い込みによるものがあった。私の両親は、父が四十九歳、母が五十二歳とどちらも若くして亡くなっている。母の母（会ったこともない祖母）も五十二歳で逝っている。そういうことから自分の寿命は五十二年と思うようになっていた。五十二歳がゴールだとすれば、最後の一年くらいは自分のやりたいことをして終わりを迎えたいと、その一年前に辞めることにしたのだ。夫の度重なる病気も背中を押した。

そんなこんなで、辞めることに躊躇はなかった。だから、最後の三か月は毎日一生懸命仕事をし、悔いなくきっぱりと終えることができた。

そうして迎えた四月。夕焼け通信は十五年目に突入し、六五五号からの開始となる。N・Rさんの「ニュース日記」、「団塊の独り言」のK・Iさん、そして、私は「専業主婦一年生」、編集後記で四ページ。

その編集後記に「今年はこの異常な暖冬で」とある。その年の冬は一九四九年と歴代タイの大暖冬だったようだ。日本海側では記録的な小雪となり、積雪量が平年の一割にも満たない地域もあったとのこと。東京や大阪、神戸、徳島などの年では冬日が一日も観測されなかったのだそうだ。それに比べ、今年の冬はどうだ。寒さが厳しいだけでなく、長く続いている。特に北日本の日本海側の積雪はすごい。片や太平洋側は降水量が極端に少なく今年の降水量ゼロのところもあるとのこと。

人生の誰彼　37

今岡　幹

いきいき寄席観覧記

本紙『座付の雑記』でおなじみの、編集長率いる活塾亭一門の子ども落語『いきいき寄席』に時折出かけて楽しんでいます。

何やらかんやらと都合が付いたときしか行けないのでほんの数えるほどしかないのですが、毎回とても幸せな心持ちになって帰ります。そしてしばらく間が空くと、また子どもたちの元気な声を聴きたくなってくるから不思議です。

初めていきいき寄席に行ったのがいつどこでのことだかハッキリしないのですが、まげにおべたことだけは鮮明な記憶として残っています。最初は子どものすることだからと少々甘く見ていたことを正直に告白しますが、実際目の当たりにすると想像以上の完成度の高さと面白さに吃驚して始終ヘラヘラと呆れ笑うしかなかったのです。よくぞここまで！と感心しきりでした。

それは型にはまった話しの筋だけを覚えたものではなく、自分の言葉として子どもらしく元気いっぱいに表現し、大勢の観客を前に物怖じせず堂々と最後まで演じきる。なかなか一朝一夕にできることではありません。時折噛んだり詰まったりすることもあるけれどそこはご愛敬、心の中で「どうした頑張れ！」と孫を見守るジイジのように応援しています。

また地元ネタや出雲弁を取り入れた創作落語も楽しめます。私は松江城築城のお話が大好きなのですが、何故か唐突に登場するマクダーネルのハンバーガーからの鮮やかなオチが快感です。堀尾親子も天界で苦笑しているに違いありません。

昨年十月にはこの松江城築城物語を巧みにこなす活塾亭あーとさんのチャリティーライブが島根県民会館中ホールで開かれ妻と二人で出かけました。ピアノに歌に落語、五百人の観衆を前にした多彩な演目が満場の喝采を浴びました。

先月カラコロ工房の地下金庫室で開かれたチャリティー落語会『子どもが語る小泉八雲』の第1回にも妻と行ってきました。いつもは控え目？な夫婦ですが今回は意を決して最前列に陣取り、感情豊かな子どもたちの小咄や、しみじみと語る怪談を堪能。こんなに間近で見るのは初めてのことで、その表情や所作、語りからはいつもとは違うひたむきな空気を肌で感じ取ることができました。

未体験の方は機会があればぜひ足をお運びください。それはそれは愉快なひとときを過ごせること請け合いです。

30代フリーター　三上治が「防衛力の強化というのは誰もが使う一般的な言葉であるが、専守防衛論的な意味でこれを使うのと、日本の国家主権の確立、あるいはその行使のためというので随分と違う」と書いている（「高市政権の行方」）。高市政権が目指すのは、このふた通りの「防衛力の強化」のうち「日本の国家主権の確立、あるいはその行使のため」のものであり、それは「国家主義」として打ち出されている、と三上は批判する。では、「専守防衛論的な意味」での「防衛力の強化」とは具体的にどんなことを指しているのだろう。

年金生活者　真っ先に思い浮かぶのは自衛官や海上保安官の処遇の改善だ。

　東シナ海などで軍事活動を活発化させている中国を警戒監視する自衛官や海上保安官はかつてない緊張を強いられている。だが、その割には給料は高くなく、自衛隊の隊舎は老朽化し、海上保安官の艦艇内の居住空間は狭く、どちらも厳しい勤務環境・生活環境に置かれている。

　こうした処遇の不十分さは、心身のストレスを蓄積させ、任務遂行中に誤認や判断ミスを誘って偶発的な衝突を招き、そのあとも冷静な対処ができずに事態をエスカレートさせる恐れがある。このため、政府は処遇改善のための費用を２０２６年度予算案にも計上している。この種の「防衛力の強化」は「専守防衛論的な意味」での強化であり、今あるリスクを減らすために必須のものと言える。

30代　中国・北朝鮮の軍事活動の活発化に対応して、やはり新年度予算案に計上されている長射程ミサイルの導入などは、「専守防衛」のレベルを超え、「日本の国家主権の確立、あるいはその行使のため」の「防衛力の強化」ということになる。

年金　それだけ見れば、抑止力の向上と言えなくはないが、相手もまた軍拡をエスカレートさせる。さらに、そうした「攻撃的」な「防衛力の強化」は自衛官らのメンタルも「攻撃的」にする。偶発的な衝突の起きる確率は高まる。

　「専守防衛論的な意味」での「防衛力の強化」は、自衛官や海上保安官だけでなく、全国民を対象としたものに拡張することができる。国民の処遇の改善、生活の向上が、中国の脅威や外国人の増加に対する緊張や不安や攻撃性を緩和し、ナショナリズムのエスカレートを抑えることになるはずだ。

　そのためのビジョンを本気で示そうとすれば、国民に痛みを求めることになる。だが、本当に必要なのは、その痛みを受け入れてもいいと国民が思うほどのスケールの大きい構想の構築だ。

30代　ロシアのウクライナ侵略、トランプのベネズエラ攻撃に見られるとおり、戦後の世界を秩序づけていた「法の支配」が崩れ始め、代わって「力の支配」があらわになりつつある。そのトレンドに押されて、日本も敵基地攻撃能力の保有など、「専守防衛」からの逸脱に踏み出している。

年金　戦後世界にアメリカが導き入れた「法の支配」は資本主義の要請によるものだ。当時の資本主義は第２次産業を牽引車とする産業資本主義の段階にあった。それは大量のモノを生産し、大量の消費者に売りさばくために、世界規模の巨大な市場を必要とした。言い換えれば自由貿易体制の構築が不可欠だった。アメリカは世界に展開する圧倒的な軍事力と、ドルを基軸通貨に押し上げた巨大な経済力によってその構築を担った。

　産業資本主義が利潤の源泉とした都市と農村の落差は次第に縮小していったが、東西冷戦後のグローバリゼーションの進展によって、旧東側諸国や中国、発展途上国の安い労働力が流入し、都市と農村の落差が世界規模で復活した。都市とは西側先進諸国であり、農村とは旧東側諸国や中国、発展途上国を指す。だが、これは他方で、先進諸国の製造業を賃金の安い中国や発展途上国に流出させる作用もした。

　そこでアメリカが編み出したのが、世界をマーケットとして金融で稼ぐシステムだ。それはすでに産業資本主義にとって代わっていたポスト産業資本主義がピークを迎えたことを意味する。だが、それは一部の大企業や富裕層だけを潤わせ、製造業の海外移転にともなう失業の増大や低賃金化とあいまって、大きな格差を生んだ。そればかりか、世界的な金融危機を招き、グローバリズムへの疑念を広げた。国家は国境の柵を高くし始めた。その最も露骨な行動が自由貿易に背を向けるトランプの高関税政策であり、それは「法の支配」の棄損を意味した。案の定ベネズエラを武力攻撃する帝国主義的な振る舞いに出た。

　それに同調して「力の支配」による国家主義に向かっているのが高市政権だと三上は見る。「法の支配」から「力の支配」への傾斜は今後、長期にわたって続くだろう。流血の戦争、無血の戦争をともないながら。グローバリゼーションの限界に突き当たったポスト産業資本主義が次の段階の資本主義に移行するのに国家主義を必要としているからだ。

　しかし、「法の支配」は弱まったとはいえ、消滅したわけではない。戦争が人間を法的関係に立ち入らせる、とカントが言ったように（「永遠平和のために」）、どこかで必ず復活する。

ニュース日記　1002

中村　礼治

「専守防衛」と「法の支配」